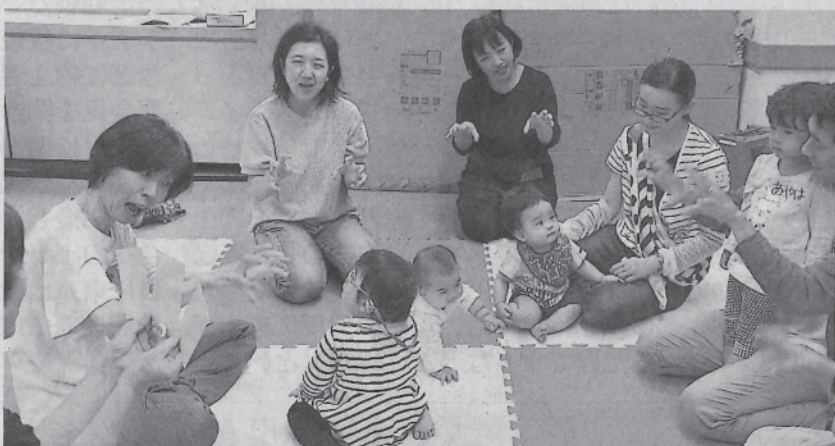


手話との出会い 乳幼児期から



乳幼児らを対象にした手話獲得支援事業「こめっこ」。親子で手遊びや絵本を楽しむ＝10月下旬、大阪市中央区

生まれてきた子どもが聞こえないとわかったとき、どうすればいいのか。そうした親たちの悩みに向き合い、乳幼児期から手話に触れあえる場を提供する取り組みが注目されています。「子どもの将来は明るいと思えた」。参加者からは、そんな声があがっています。

「今日の絵本は何かかなー」
10月下旬の週末。大阪市内の会議室は、乳幼児の親子連れのにぎやかな声や手の動きでいっぱいになった。

「太陽のおめんかぶってるの、だーれ?」。ろうのスタッフが絵本を開いて手話で語りかけると、身を乗り出した子どもたちは、次々と手を使って「ライオン!」と答えた。

聞こえない子や聞こえにくい子たちが自然に手話を習得できるようにサポートする「こめっこ」という事業。大阪聴力障害者協会が月2回、大阪府と連携して絵本読みや手遊び、手話学習などをする集いを開いている。毎回約20家族が、他府県からも通ってくる。

最大の特徴は、活動の中心となるスタッフの多くが手話を母語とするろうの人という点だ。音のない世界で生まれた手話を自在に使うスタッフの1人、久保沢寛さん(28)は、「眉の動き、目の開き具合、ほおの動き方など全てが盛り込まれて文章になるんです」。

大阪府東大阪市の柳川江里乃さん(33)と息子の一真君(4)は、こめっこに通って2年半に

ろうの人たちと触れ合い「道が開けた」

なる。

一真君の聞こえが気になったのは生後半年ごろ。大きな音に反応しない。呼んでも振り向かない。大病院に行くと、「重度の難聴です」と告げられた。

初めての子もだった上、聞こえない。息子とどうコミュニケーションをとっていいかわからず、「お先真っ暗だった」。

2歳を迎えたころ、こめっこに出会った。来てみて、驚いた。スタッフも、参加する親子も、みんな笑顔で、見たこともない表情豊かな手話が飛び交っていた。「めっちゃ生き生きしてる」。ろうの人の文化や生き方に触れるうち、「道が開けた感じで、『この子の将来、明るいんだ。大丈夫だ』と思いました」。

一真君の手話表現は、どんどん増えた。江里乃さんもやりとりできるのがうれしくて、次々に覚えたという。

こめっこは、府の手話言語条例に基づき2017年度に始まった。「手話の教育機会が保障されていない」という問題意識が背景にある。手話は障害者基本法で「言語」と明記されているのに、習得については学習指

導要領への記載すらない。「かつて多くの教育現場などで、発

声や相手の口の形を読み取る口話ができなければダメという考え方があった」(府の担当者也)。

こめっこ事業を先導してきた神戸大の河崎佳子教授(臨床心理学)は、約30年にわたり聴覚障害者を支援する中で、「音声言語だけを押しつけられた苦しみを見てきた」。補聴器を使ったり人工内耳の手術をしたりしても、聞こえる人と同じようにはならず苦しむ人は多い。

こめっこでは人工内耳も声を出して話すことも否定しない。その上で、河崎さんは訴える。「聞こえる子が自然に日本語を獲得できるのと同じように、環境さえ整えたら手話も自然に獲得できる。手話という言語は、声をやりとりできるんです」。

手話がしっかり身につけば、それが土台となって、日本語もしっかり身につくと考えている。難聴が専門の大阪市立大大学院の阪本浩一・病院教授(耳鼻咽喉科)は、「難聴の子どもには言葉の発達を促す教育が非常に大事。難聴の程度は人それぞれで、多様な教育方法がある。そのひとつとして手話に触れる場がある意義は大きい」と話す。(中村壻二郎)

手話と口話「両方大切」

映画監督・今村さん

手話と声を使うコミュニケーションのあいだで葛藤し、「私にとっては両方大切」と思うようになった人がいる。映画監督でろう者の今村彩子さん(40)だ。

先天性の高度難聴と診断されたのは2歳の時。耳が聞こえる両親の「社会で生活できるように」という教育方針のもと、すぐに平仮名



大学で手話の授業をする今村彩子さん(名古屋市の名古屋学院大学)

を学び始めた。家の中にあるものには、母親が「てれび」などとメモを貼り付け、今村さんはそれを見て単語を覚えていった。両親の口元を読み、口で話す練習をした。ろう学校幼稚部から地元の小学校、そして中学校へと進んだ。ただ、教室内を歩きながら話す教師の口元を読むのは難しく、2年生の時にろう学校に転校した。

ろう学校で必死で手話を覚えたが、教師はみな耳が聞こえる。手話で豊かに会話をする子よりも発音がきれいな子が褒められるのを見て、「きれいな発音のほうがいいんだな」と感じた。

自身の中にも刷り込まれた手話への偏見がなくなったのは、大学

時代。米国に留学した時に「私はろう者」と胸を張り、堂々と手話で話す学生に出会ってからだ。誇りを持って「私はろう者だ」と語れるようになった。

そして、声を出すことをやめた。声を出しても、自分では聞こえない。「聞こえる人に近づきましよう」と強いてきた社会への反発もあり、「手話を使って生きていこう」と考えた。

だが、次第にそれにも違和感を覚えるように。どちらかひとつだけを選ぶことが、自分にとって自然なことなのだろうか。迷い、悩み気持ちは完全には消えていない。それでも今は「どっちも好きだし、どっちも必要。そういうふう」に受け止めたいな、と思っています。(山本奈栄香)